

日系アメリカ文学のジャポニズムとアメリカニズム

——人種と世代を超えて——

檜 崎 寛

1 多文化主義の理想と現実

本論文では、日本とアメリカ合衆国の文化の接点であり、掛橋でもありうる日系文学のテクストを取り上げ、多文化主義という視点から、その執筆と受容に内在する問題を取り上げ、日本文化を利用してアメリカの読者に迎合していると思われる面が現在でもあるということを論ずる。

1節で論点に関わる状況や概念を素描し、2節で Thomas Pynchon の新作 *Against the Day* (2006) に表現される、日本人とアメリカ人とはなにかという問題に触れ、アメリカのポストモダニズム文学の到達点の例として、論点とより広い現代文学との関連を示す。3節で日系文学研究の経緯を踏まえ、4節で Monica Sone の *Nisei Daughter* (1953) と John Okada の *No-No Boy* (1957) を取り上げ、そのアメリカニズムを再確認する。論文の中心として、5節で Kyoko Mori の *Polite Lies* (1997) と Jeanne Wakatsuki Houston の *The Legend of Fire Horse Woman* (2003) を取り上げて、そのジャポニズムを指摘する。まとめとして、そうしたアメリカニズムとジャポニズムを多文化主義と文学の課題として展望する。

人種的にも、思想的にも、地理的にも、日本の文化とアメリカの文化の接点にいて、アメリカに日本文化を伝えているのが日系アメリカ人作家である。そして、その作品を日本人として検証することは多文化主義の前提としての異文化理解の可能性を検証する作業である。

そうした状況認識は今後も大筋では通用するであろうけれども、日本人である文学研究者の役割と、研究の視点としての多文化主義という概念とその経緯、さらに、より広く国家や文化というキーワードが抱える問題は避けて通ることができない。以下論点を文化研究の現状に位置づけておく。

比較文学という範囲に限っても、研究者が直面する課題は多い。亀井俊介は「比較文学の危機と楽しみ」において、文学・文化について、国際的な視野の拡大はもちろん比較文学の生命だが、「作品」や「もの」に集中して、読み、調べ、味わい、考察する作業が不可欠であると述べて一次資料読解の大切さを主張しつつも、一次資料を研究する方法や視点の選択とバランスのとり方の困難さを指摘している。(15) さらに付け加えるなら、「猿猴」として自らを表現する亀井の視点に加えて、風土や種さえも越えた文化、ないしは、認識や行動の普遍性をも視野にいれる必要がでてきていると考える。

そうした問題含みの視点、ないしはキーワードの代表が多文化主義である。多文化主義の

定義は困難であるが、一つの国家や地域の中で、異なった文化が共存することが良いことであるという考え方であるとしておく。その上で、経済や資源の格差の問題に多文化主義が有効に機能してこなかったという現実を問題としなければいけない。芸術という範囲に限っても、Elaine Kim は多文化主義(multiculturalism)を1980年代から1990年代初頭までの一時的な現象であり、展覧会のような枠組みのある実践としては、芸術性と内容との選択として、実現不可能なトレンドと見ている。(2003, ix, 43) その知見を以下の節で日系文学に応用してゆくことにする。

さらに問題の混迷を深めるのが文化の定義であり、評価であろう。Terry Eagleton は *The Idea of Culture* において多文化主義を文化に対する考え方の皮肉な展開として位置づけ、疑問をなげかけている。マフィアや拷問を文化として受け入れるかという選択は、新しい関係性を全体として表現する芸術の役割とも関わることになる。(Eagleton, 15, 62) この文化のカテゴリーの問題は、亀井の危機感と共通性があり、論点の位置づけ作業の最後に、人間性というさらに大きな問題につながる。

文学が扱う人間性の定義は、現代のインターネット文化の浸透や遺伝子の解明により、人間の認知や想像力の生物学的側面からの研究の必要性を示している。Donna Haraway はサイボーグという表現で、ネットに接続された人間の可能性を示したが、その後人類中心ではあるが、より広い生物との共生という観点から、コンパニオン動物との関係で人間の存在を考えるように変化してきた。Eagleton も *The Meaning of Life* (2007)で、“happiness” と “love” を中心とした近代における人間の根本問題と取り組んでいる。このような視野の広がりには多文化主義の内実と有効性と切り離せない関係があり、Kim が指摘した芸術上の一時的流行として終焉した多文化主義の限界を示している。そうした背景の中に日系文学のジャポニズムとアメリカニズムを位置づけることがこの論文の目標となる。

ジャポニズムは、この論文とのかかわりでは、19世紀後半から現代にいたるアメリカにおいて日本に関して流通した認識の総体であると定義し、特に日本のイメージとして、フジサン、芸者、サムライとセツプクなどのキーワードにあらわれるものであるとしておく。また、アメリカニズムも、Sacvan Bercovitch が示したように、エレミアの嘆きから連綿と続くイデオロギーであるが、それを拡大解釈して、日本と対比の上で、アメリカが自由で民主的であるという意識であるとしておく。そうしたジャポニズムとアメリカニズムが、アメリカの読者に受け入れられやすい形でいまでも続いていることを例証し、文化の掛橋としての日系文学がおかれた状況を再検討する。

2 現代アメリカ文学からの展望

1節で概観した文化や人間性に関する多様な視点を取り込み、それをフィクションとして表現しようとしたポストモダニズム文学の代表的な到達点として、Thomas Pynchon の

Against the Day における日本人とアメリカ人であることの多角的な文学的表現を確認し、3節以降で日系文学のそれと対比してゆく。

Pynchon は最新作でも、アメリカの理想や、人種表象として日本人のイメージを取り上げている。要約や説明が不可能なほど複雑な枠組みの1000ページを越えるこの小説は、シカゴ博覧会以降の世紀転換期を中心としながら、時空を越えた論理や状況を扱っている。舞台背景としてもアメリカ合衆国を中心に、ヨーロッパ大陸だけでなく地中の空間や、国家を越えた文化共同体が構築された空の上の社会を想定している。そうした小説の登場人物たちの接点であり、移動手段でもあるのが気球と飛行船であり、その発展形としてタイムマシーンまである。小説の展開に関わるキャラクターとして、犬が人間と同等の能力と個性を持たされている。登場人物たちを動機付けているのが同性愛を含む愛や性欲であり、怨念や復讐である。以上、いずれの特色も、彼の小説で初めて現れるものではないし、ポストモダニズム小説の傾向ではあるが、ここでそれが1節で概観した現在の文化や文学の抱える問題を反映していることを指摘しておく。

この小説において、アメリカとはなにかという問の答えは、当時の階級闘争を背景に労働運動の流れの中のアナキズムを媒介として、多文化主義と関わる。アメリカにおける資本主義の混乱期において、社会進化論といわれる思想と同時に、労働運動やユートピア運動も存在していたという歴史的状況を反映しているのが以下の引用である。資本家と労働者との戦いを命からがら逃れた少年 Jesse の作文を中心に、少年をとりまく大人の反応を読み解き、作者のアメリカ観の例とする。

Jesse brought home as an assignment from school “write an essay on What It Means To Be An American.”

“Oboy, oboy.” Reef had that look on his face, the same look his own father used to get just before heading off for some dynamite-related activities. “Let’s see that pencil a minute.”

“Already done.” What Jesse had ended up writing was,
It means do what they tell you and take what they give you and don’t go on strike or their soldiers will shoot you down.”

“That’s what they call the ‘topic sentence’?”

“That’s the whole thing.”

“Oh.”

It came back with a big A⁺ on it. (1076)

学校で「アメリカ人であることの意味」という作文を課された少年 Jesse の一行のエッセイにはアメリカの夢とか自由は見当たらない。少年の経験と時代背景を考えれば、理解でき

るが、権力者が軍事力を背景に庶民を支配しているのがアメリカ人であることの意味であると少年は断言しているのだ。

ただし、Pynchon はそうした少年の目から見た単純なアメリカ批判を、より複雑な大人の反応と対比させ、展開している。Reef は父親としての役割から、Jesse の課題に複雑な反応を示す。まず、国家と国民を前提とした抽象論に当惑し、自分の父親がアナキストとして爆破作業におもむく時の表情をうかべると作者は説明している。父親も理想と現実の間で、家族よりもアナキズムを選択した。Reef も殺された父親の復讐にかかわった後に、ささやかな家庭的幸せを守ろうとしている。だから、宿題に手を貸そうとし、Jesse の一行をトピックセンテンスだと誤解し、単純化されたアメリカ観に戸惑うのだ。さらに、作者は展開し、その作文が大きなA+がつけられて返されたことを付け加えて、少年のアメリカ観を切り捨てない教育者の存在を間接的に描いている。

この引用から読み取ることができるアメリカ批判は、先に触れた Bercovitch のアメリカのイデオロギーとしてアメリカの夢に重なる面があり、後に日系文学に即して見るところのアメリカニズムとも関わってくる。この引用で確認しておきたいのは、アメリカ人であることの意味という課題に対する単純化された答えが、大人たちの反応を通して展開され、その大人たちの世界が、理想と現実、知的判断と本能的行動、国家とジェンダーや人類の枠組みのなかに多角的に位置づけられて表現されていることである。

日本人をどのように認知するかという問題も、同様に単純な本質主義を措定したうえで、より広い枠組みのなかで表現されている。そうした展開を読み取るために長い引用を分析する。

It had become disagreeably evident that young Prance was widely taken now for a Japanese spy, allowing Kit only so much slack to try and convince the Englishman's many ill-wishers and otherwise.

"If only you didn't ask so many questions all the time. Scholarly curiosity's one thing, but you just don't know when to quit. And you don't look too local either."

"Well I certainly don't look Japanese." Then into Kit's silence, "Do I?"

"How many Japanese does anybody out here ever get to see? Prance ol' buddy, let's face it, out in these parts — you're Japanese."

"But I say look here, I'm *not* Japanese. I mean am I walking about in sandals? gesturing with fans, speaking in unsolvable riddles, any of that?"(783)

日本人と間違って認識されている Prance に対して、Kit はそうした間違いが起こる原因となる状況をわかりやすく説明していて、この指摘は現在のジャポニズムを再考する手かがりともなる。その説明とは、現地シベリアの人々が本物の日本人を知らないから、噂やあ

やふやな特色で日本人という枠に入れてしまうのだという内容である。そうした説明に対して Prance は自分が日本人でないという事実を当時の日本人観に便乗して証明しようとする。彼がイメージする日本人とは、ぞうりをはき、身振り手振りに扇子を使い、なぞめいた格言のようなものを乱発する人種であり、それは *Mikado* (1885) の滑稽であると同時に腹立たしい登場人物たちを髣髴とさせる。

作者は、Kit の日本人観の背景を小説に描きこんでいる。アナキストとしての活動を普通 (normal, 91) な家族生活で隠蔽してきた父親の子供として、また Reef の弟として、資本家に裏切られて諜報活動と関わる Kit は、人種や文化というカテゴリーを本質から離れた危ういフィクションとして見ているのだ。さらに、実体験として、彼は全裸でカウボーイ・ハット (cowgirl hat, 556) をかぶった日本人女性の数学者 Umeki Tsurigane に魅惑され、関係をもった過去もある人物として設定されている。だから、Prance が自分が「日本人とはどうしても見えないだろう」と問いかけても、返事に窮するのだ。見る側の先入観や知識で、日本人観は影響を受けるし、見た目で日本人というカテゴリーに嵌め込むことができない日本人女性もいることを彼は知っているからである。

現代文学の到達点の一例としての *Against the Day* において、アメリカ人や日本人の特色が問い続けられていると同時に、そうした問と答えが Pynchon の小説ではさまざまなレベルや視点から位置づけられ、表現されていることを確認して、日系アメリカ文学のより単純で誤解を招きかねないアメリカニズムとジャポニズムを読み取るための比較の対象としておく。

3 日系アメリカ文学研究の視座 ——多文化主義と世代論を中心に

日本における日系文学の研究は多文化主義と関わりつつまとめられてきた。ここでは論点と関係させるために、日系文学をより広い視点からまとめられた2冊の論集におさめられた論文を例にあげ、さらに移民文学の研究に触れて論点との関連を説明する。

1冊は、木下卓他編著の『多文化主義で読む英米文学——あたらしいイズムによる文学の理解』(1999)で、そのタイトル自体、「あたらしいイズム」という表現で亀井の危機感や Eagleton の問題提起に関わるし、Kim のいう芸術上の多文化主義が一時的現象であったという指摘を考えると、文学研究の影響関係を示唆する。もちろん、この論集は多文化主義というものをお題目のようにとらえているわけではない。編者一同による「まえがき」においても、あたらしいイズムによる読み直しが、「自由主義的な寛容の精神を反映するがごとき多元論(pluralism)に回収されてしまうものではなく」、「異文化間の緊張関係をも接收しようとする貪欲な文化のありかたを暴くこと」や「アイデンティティー・ポリティクスの是非を問う」(ii)ことまでも課題としていると書かれている。

ここでは、この論集におさめられた小林富久子の論文「多文化主義的家族像——日系アメ

リカ作家たち」を例に、その世代論の現代的意義を問い直しておく。小林の論文は、日系移民の歴史を背景として、一世から三世までの日系文学の大きな見取り図を提示しているもので、二世の日本かアメリカかという二者択一的な世界観が、三世の文学ではより多元的、雑種的になり、そのようなテクストを読むことにより、わたしたちは「驚きと意外性に満ちた、豊かな多文化主義的感性を醸成」(189)することができると結ばれている。小林論文を手がかりとしつつ、小林が述べている世代論と可能性がかならずしも日系文学で実現されているわけではないという例を以下の4節と5節で検証していく。

2冊目として、アジア系アメリカ文学研究会編の『アジア系アメリカ文学——記憶と創造』(2001)を取り上げ、「日本では初めてのアジア系文学評論集」(iii)として、この構成や視点を踏まえることにする。この論集の構成は最初にアジア各国の歴史的背景を論じ、最後に小林富久子の論文「移動・越境・混血——最近の日系女性作家における主体意識」をおいている。さらに、植木照代はアジア系文学の背景としての白人読者市場とその影響についても触れていて(xi)、この点も論点と関連する。

移民文学という広い視点から考えるならば、アメリカの特異性、優越性が表現されているのは、その作者や読者の立場からすれば当然であるようだ。David Cowart は *Trailing Clouds* において、Vladimir Nabokov、Saul Bellow らの作品を踏まえて、現代の移民文学を検証している。移民文学の受容という政治経済の現実にあふれて “American exceptionalism” (32) やその逆説的表現と思われる “jeremiad” (33) の出現を説明している。移民文学は作者がアメリカの読者と文化に受け入れてもらうための手段でもあるのだ。

小林の論文を、先に触れた Eagleton の多文化主義が内包する問題との関係を考えて、より広い文学や芸術の流れに位置づけることを試みたが、その文学的実践の難しさを以下の節で例示してゆくことにする。

4 日系アメリカ小説のアメリカニズム

現時点から振り返ると、日系人の文学にも作者の立場と出版の状況を反映していると思われるアメリカニズムが目立つということを、50年代の作品を例示して、文化のバランスのとれた表現の困難さを確認する。本論でアメリカニズムと表現している傾向は、アメリカのほうが日本よりも好ましいといった単純化された描写として、この2つの作品にはっきり表れている。まずアジア系文学を社会的視野から展望し、評価している先行研究として Kim を踏まえ、Monica Sone の自伝をアメリカ文化中心の表現として読み取る。

アジア系文学の先駆的な研究書である Kim の特色は、その副題にもあるとおり、社会的なコンテキストと重ねて紹介するという方法であるが、日系人作家がアメリカ文学のなかで果たしていた役割についての指摘もある。Kim が *Nisei Daughter* を取り扱う章のタイトルも “Sacrifice for Success: Second Generation Self-Portrait” となっているし、アメリカの出版

界と読者の受容という点から、小林の指摘する二者択一は、幻想であったと指摘している。現在でも続いていると思われる状況を Kim は説明している。

Until recently, published Asian American writers presented the Asian American experience lightly and euphemistically, even humourously, without the significant expression of concern about the manifestations of social injustice. Bitterness against Asian cultures and values, and Asian American values and life styles, were far better tolerated by publishers and predominantly white readership, which has been traditionally more receptive to expressions of self-contempt and negation on the part of members of racial minorities than to criticisms of problems in American society. (59)

そうした社会的現実のなかで、アジア系自伝作家たちは、掛橋(cultural bridge, 59)として与えられた役割を、どのような条件であれ、受け入れて出版にこぎつけたのだと Kim はまとめている。Sone の作品に関しても Kim はその作品がまるで “high school civics class speech” のようにまとめられていると表現している。あえて意識すれば、高校生レベルのアメリカ公民のスピーチであるという評価になるだろう。Sone もアメリカの読者に好まれるアメリカ像を描いたという点で、アメリカニズムに関わっている。

アジア系アメリカ文学研究という分野を回顧した King-Kok Cheung も、アメリカ主流文学との関係性から、アジア系文学は “model minority” の言説として単純化され、そのエキゾチックな特色が好まれた反面、文学性の検討が十分ではなかったと指摘している。

この自伝のアメリカ観を端的に表現しているのが “Paradise Sighted” というタイトルの7章であり、天国はアメリカ人の世界であるということの示唆である。この章は主人公 Kazuko の結核療養所を、無口で閉鎖的な日本人と、社交的で明るいアメリカ白人女性を対比して、人種の実験室のように描いている。そして、Kazuko は、療養所を退所する段階で、もはや日本人社会で幸せになることは出来ないだろうし、結婚相手も見つからないだろうと悲嘆にくれる。そうした彼女の心配を笑いとジョークで受け止めるアメリカ人たちに驚いた後に、幸せを感じる主人公の表現は、Kim が指摘するように、アメリカ賞賛のスピーチのようである。

For a second I didn't know whether to cry or be angry, but when I saw them looking at me with warm affection, I suddenly felt comforted. Chris, Laura, Anne, Elaine and my other companions had accepted me into their circle as I was. They did not care that I looked different, said or did a few odd things, because basically we liked each other. For the first time in my life I felt sheer happiness in being myself. (143)

この引用を論点とのかかわりで分析するならば、アメリカの読者に受け入れられやすい細部が目につく。まず、療養所には日系人も日本的な名前で登場するにもかかわらず、主人公 Kazuko の仲間(companion)たちの名前が全てアングロ・サクソンのことが人種的に偏っているし、彼女たちが日系人である主人公をアメリカ的集団(circle)に受け入れてくれたことで安心し、慰められると書かれている。さらに、やはりアメリカ社会を中心に考えた差異(looked different)や珍妙な行動(odd things)を問題としない、多様性と個性の尊重に触れて、主人公は生まれて初めてありのままの自分である幸福感に浸ると書かれているのである。

天国を垣間見るというイメージの後には、父親が高級住宅地に家を手にいれ、長男が日本的伝統をしりぞけて婚約するということや、その次の章以降で真珠湾攻撃と日系人強制収容所の体験が描かれるが、人種差別や不当な拘留に対する議論はない。自伝の最後に収容所を出て、アメリカの大学で学び、希望をいだいて主流(mainstream)に合流し、自分のなかの日本的なものとアメリカ的なものは一つに融合したと結ぶ主人公の語りは、まさにモデル・マイノリティーとして表現されている。

50年代のアジア系アメリカ文学のアメリカ観の一次資料としてとりあげる2冊目の作品 *No-No Boy* も、そのタイトルとは裏腹に、アメリカ人やアメリカ社会の賛美とさえいえる表現やイメージが散見する。現時点から顧みるならば、強制収容所を背景とする日系人に対する差別に対して、ノーを突きつけたと解釈できるノーノー・ボーイは、日系人のアメリカと日本のどちらを選ぶかという、選択を強いられた。しかしながら、この小説はノーノー・ボーイとして2年の収容生活を終えた主人公 Ichiro の帰還から始まるので、拒否にいたる状況や心理は描かれていないし、強制収容所に対する主人公の問題意識も中心とならない。

日本人である母親は戯画的で狂信的な性格を与えられている。主人公は、アメリカ軍に志願して帰還した日系の友人に軽蔑され、唾をはきかけられても、相手を正視することも、反論することも出来ないし、そもそも彼がノーノー・ボーイとなった理由は母親だと思い込んでいる。しかも、その母親は、愛国的日本人を日本へ帰還させる船がアメリカに来ることを信じて、狂い死にするような女性であると設定されているのだ。それに対して、アメリカの社会には、日本人の特性を評価し、ノーノー・ボーイと知りつつ主人公に社会復帰の機会を与えてくれるアメリカ人が描きこまれている。

現時点から読み直すと不思議なのが、アメリカの包容力を暗示する、結末に近い場面である。アメリカを放浪した後、Ichiro は “I have been guilty of a serious error” (232) と自分が間違っていたことを確信し、法に基づいて償いをして、アメリカ社会に受け入れられる希望をいなく。“There was room for all kinds of people. Possibly, even for one like him.” (233) その受け入れられ方が、決して市民権運動にはつながりそうもない象徴的な描写であり、それが最後から二つ目に章の結末として強調されている。“He walked up to the depot and turned up Jackson Street, and, while he waited for the light to change, the cluster of people at the bus stop hardly gave him a glance.” (233) この場面では、無視されることと許容されることが、

アメリカの自由と包容力を混同しているようで、見えない人間としてのマイノリティーの歴史を連想させる。

最終章の最後の文章も同様な曖昧性をはらんでいる。主人公は放浪の過程で触れ合ったさまざまな人種や立場の人間たちを回想しつつ、かすかではあるが、かなり強い希望を感じている。人種差別をきっかけとした喧嘩とその結果としての友人の事故死の直後にも主人公の希望は変わらない。

He walked along, thinking, searching, thinking and probing, and, in the darkness of the alley of the community that was a tiny bit of America, he chased that faint and elusive insinuation of promise as it continued to take shape in mind and in heart.(251)

結果的に、主人公は強制収容所に抗議もせず、人種差別主義者と意見を戦わすわけでもなく、曖昧な自己卑下と我慢のあげく、かすかな希望を最後の文章も繰り返していて、この小説も、Kim が Sone について指摘しているモデル・マイノリティー像をアメリカの読者に提供していると考えられる。

5 現代日系アメリカ文学のアメリカニズム

現代においても、日系アメリカ文学は日米文化の掛橋としての可能性を十分に実現していない。その理由は、作者と読者との関係、アメリカ文化における日系文学の位置づけと関わる。以下 Kyoko Mori の “On Being a Woman Caught Between Cultures” という副題のエッセイ集と Jeanne Wakatsuki Houston の *The Legend of Fire Horse Woman* を日本人の描写と、その背後のアメリカニズムを中心に読み解き、ポストモダニズムの例としてあげた Pynchon の文学表現との比較を念頭に置き、日系文学の問題点を指摘し、最終節における日系文学研究の課題と展望につなげる。もちろん、取り上げる作家たちの知識や感性の限界をあげつらうことが目的ではない。

世代論から言えば、日系一世にあたる Mori は、現代の日本をアメリカ社会に伝えることができる立場にいるにも関わらず、日本人なら首を傾げたくなるようなステレオタイプに近い日本文化や日本人像を書きこんでいる。彼女の *Shizuko's Daughter* (1993) は “An ALA Best Book for Young Adults” に選ばれているし、この小説の背景をなぞった *The Dream of Water* (1995) という回想記ではその後の来日のことにも触れている。その来日の印象をまとめたのが取り上げるエッセイ集、*Polite Lies* である。この本の裏表紙に *The Washington Post Book World* からの引用として、彼女が “uniquely qualified to write at an intersection many have visited but few have truly understood” という評価が転載されているが、その特別な「資格」と真の「理解」の限界を指摘する。

そもそもこの本のタイトルが曖昧な日本人、礼儀は正しいけど気持や意図がわからないという日本人のステレオタイプを連想させる。日本人の先行研究としては、大脇美智子が Mori の書き物が「オリエンタリズムを再生産」する危険があることを、イデオロギーからの逃避的姿勢の結果として指摘しているが、ここでは、単純化されたアメリカ向けの、アメリカを相対的に賞賛する表現を分析する。

第一章は“Language”という見出しであるが、そこで述べられる日本語と日本文化との関係を論ずる Mori の説明は言語を通しての日本文化紹介としては単純すぎる。日本へ向かう飛行機のなかの、文字通り理解すれば、(バカ)丁寧でオーバーな機内アナウンスをきっかけとして、アメリカとの言外の対比を読み取ることができる。

Every fourth or fifth sentence has the words *sumimasenga* (I am sorry but) or *osoremasuga* [sic](I fear offending you but) or *yoroshikereba* (if it's all right with you). In the crowded cabin, the polite apologies float toward us like a pleasant mist or gentle spring rain. But actually the politeness is a steel net hauling us into the country where nothing means what it says. Already, before the plane has left American airspace, I have landed in a galaxy of the past, where I can never say what I feel or ask what I want to know. (5)

ここでも、この本のタイトルに含まれる「礼儀正しさ」を中心に日本語と日本文化に詳しくないアメリカ人に向け、Mori が暴いてみせる「真の」機能が対比される。表面的には“pleasant mist”や“gentle spring rain”という自然の比喩が、実は鋼鉄の網の目なのでであると解き明かされる。「恐れますが」というアナウンスは聞いたことがないし、全体として儀礼的表現を文字通り解釈し、そこから文化の違いに飛躍することが問題である。Mori は日本という国ではどのような言葉もその通りの意味ではないのだと説明するが、その背後にはアメリカでは言葉の意味が確定しているという意識を読み取ることができる。さらに、日本が過去の世界であり、自分が感じていることを決して表現することができず、知りたいことをたずねることも出来ない小宇宙であるとの記述は、彼女の「資格」の限界とアメリカよりの立場を示している。

そうした日本文化や言語に関する理解や知識に関して、漢字と英語に触れた2つの例を挙げて、やはり、その限界を確認しておく。最初の例は、“A Woman’s Place”という章で、日本の家庭においては女性が財布を握っていて、家に関する決定権を掌握しているという「外国人」(foreigners, 90)には驚くべき実態を紹介した後に、漢字の分析にいたる箇所である。

Even the Japanese pictorial character of *safety* is composed of parts suggesting “a woman under a roof.” It is a woman, not a man, who gives a sense of security to a house in

ここで言及されている絵画的文字は「安」であると思われるが、アメリカ人に対して漢字の神秘を解き明かすには、不用意な説明であろう。たしかに構成要素としてはそのような解釈も不可能ではないが、藤堂明保編の『学研漢和辞典』(1978)では会意文字として、「女性を家の中に落ち着かせるさま、押さえつける意味を含むと、逆な解説がなされている。Moriの漢字解説は誤解の恐れがある。

日本における性に関する英語の氾濫に関しても、その対比の方法が偏っている。“Bodies”という章では、自らが日本ですごした少女時代に、性を語る言葉を持たなかったと述べた後に、性に関するカタカナ語について解説している。

Even the few articles we found in women's and young girls' magazines used English words for anything related to sex — *sex*, *penis*, *orgasm*, etc. To this day, I am not sure what the original Japanese words for these things are, if such words exist at all. The borrowed English words gave an impression that sex was something that happened only in foreign countries or on another planet.(111)

ここでも、前の例と同じように、辞書を調べれば、彼女が例にあげている言葉はアングロ・サクソンの言語としての英語という意味では外来語であるし、比喩的な表現に由来する言葉も含まれることがわかる。そうした知識の問題が文化的価値観につながられていることも前の例と同様である。肉体について、正確な言語で表現し、性を身近なものとして扱うことがよいという肉体観を支持している効果をもつことになる。これは歴史的にはオリエンタリズムを逆転させているという意味では興味深い現象であるが、日本人なら、当時の女学生ならずとも、日本文化を真に理解している人が書いたとは納得しがたいものである。

ここまで、情報化や実際の交流が進んだ現代でも、日本文化の紹介と掛橋という観点から、アメリカの読者を想定して書かれている例をあげて示したが、続けて、文学的表現の例を踏まえて、同様な問題が抜きがたく残存することを指摘する。

エンディングで日系人の強制収容所に日本人の丙午の迷信とインディアンのゴースト・ダンスを組み合わせる Jeanne Wakatsuki Houston の初めての小説、*The Legend of Fire Horse Woman* は日本のイメージをより多元的に浮かび上がらせようとした現代小説として注目に値すると同時に、アメリカの読者に日本の文化を伝える媒体としては問題を残す作品である。この作品は、丙午に生れた女性 Sayo が、芸者あがりの師匠(mentor)に導かれ、生まれや過去をいつわり、カリフォルニアで日系人一世の男性と結婚し、Paiute インディアンの男性 Cloud と恋に落ち、地震や第二次世界大戦という状況に翻弄され、強制収容所の鉄条網も人種をも乗り越えた自由と幸せをつかむという筋書を軸として展開する。構成としても、強制

収容所にいる現在の描写と、イタリックスで表示される過去の回想が交互に展開する、日系文学としては新しい工夫が見られる。Maxine Hong Kingston の作品に見られた、日系人やインディアンから白人を“ghosts”として表現するなど、全体として注目に値する実験的作品であると言える。

日本とアメリカの文化の掛橋としてみた作品の問題の所在は、父親が決めるだけでなく、性的にも関係してしまう、Sayo の写真結婚とか、チャイナタウンのアヘン窟に加えて、芸者などに関する類型的な言及の多さで暗示されるが、ここでは Sayo を中心に日本とアメリカの文化的背景やイメージを作品に即して検討してゆく。

日本では結婚できない丙午生まれの女性という設定も、やや極端だし、Sayo の年齢とは暦の上で一致しないのであるが、そうした因習に縛られた日本に対して、アメリカの自由が対比的に強調されているだけでなく、勇み足とさえ思われる多様性自体の過大評価が主人公の視点から表現されている。

Here in America, the rules were different, because what was being thought in each individual's mind was different. In fact, the more different the thought, the more value it had! (132)

アメリカでルールが日本と違うだけでなく、個性の違い自体を価値として強いることを、Sayo は強調している。“*She had adopted an American attitude toward what constituted fulfilment — challenge and excitement.*” (284) 丙午の女性が日本では結婚も出来ず排除されるのに対して、アメリカではヒロインであり、女性の特性と力量を発揮せねばならないのだという考え方に連動する。

She was to complete Mentor's karma. She would extend Mentor's line, the line of the Fire Horse Woman, outcasts in Japan, but heroines in America where they must realize this feminine power in order to survive and prevail. (300)

この引用では、師匠のカルマを受け継ぐという神秘的な色づけが気になるが、Sayo は丙午の迷信を含めて、そうした日本的因習を否定してアメリカの個人主義を実践してゆく。自分がやっていた性の売買を目的としない茶屋が、商売敵に放火され、そこで働いていた女性が焼死した後の主人公の責任の取り方の日米対比が「セップク」に集約され、類型的な日本のイメージを繰り返している。

In Japan, such a calamity might drive a woman to commit seppuku. But here in America, Sayo did not turn guilt on to herself; she refused to blame herself for the

このような災難が日本人女性を「セツプク」に追い詰めるのは奇異な感じがするが、ここでも、主人公の意識の説明にアメリカ的価値観が前提とされている。

この小説においても日本とアメリカの文化や伝統が対比的に描かれていて、21世紀におけるアメリカ読者に対する日本文化の紹介としては誤解をまねくものであったり、従来のステレオタイプをなぞるものである。最後に、そうした異なる文化を融合し、あらたな可能性を示している最後の場面を分析して、この小説の文化的表現の問題点の検討を続ける。

最後の場面で、主人公 Sayo は、死んだと思って長年音信不通であった Cloud と再会し、強制収容所を脱出する。父親である Cloud にも、子供の当人にも、知らせずに産み育てた娘 Hana や孫たちにあらたな自己認識を与えることになるし、アメリカ対日本という二項対立に、先住民という第三項を加えている展開であるように見える。まず、先の引用を踏まえて、その複雑化の要因である Cloud の描写を検討した後に、最後の二人のダンスのイメージと表現を分析する。

アメリカにおけるルールが日本とは異なるということを表現した先の132ページの引用は、直前に Sayo と Cloud の間での文化儀礼としてのお辞儀に関するやりとりが描かれているが、その異文化交流は日米文化の二項対立という図式を脱してはいない。Sayo は Cloud に感謝の気持ちを表すために深々とお辞儀をするが、Cloud はそれを制止する。その論理が、Cloud の習慣ではお辞儀をしないので、二人の間ではそうした儀礼はなしにしてくれないかという、アメリカ先住民の文化だけでなくアメリカ的な男女平等を暗示するものである。ただ、文化が違うだけで、優劣がないという原理的な考え方を参考にするまでもなく、お辞儀をしないほうに統一する理由は明示されていない。あえて言えば、それがアメリカ風であるという解釈が可能で、日本よりアメリカ風へという選択肢は二項対立に還元されてしまう。

さらに、ジェンダーという視点を解釈に加えるとさらに異文化交流の内実が怪しくなってくる。この場面は Cloud の男としての行動力、知識、判断力を前提として、彼に合わせるという形で、二人の異文化が折り合いをつける結果となっている。男としての彼は、Sayo にとってどのような男とも異なり(131)、真の戦士(true warrior, 131)であると感じられる。この戦士のイメージはサムライ(Samurai warrior, 71; her samurai warrior, 319)のそれにたとえられているので、虚礼廃止の思想的背景としてのジェンダー表現は日本人とインディアンを置換したに過ぎない側面が垣間見られる。

作者は小説をまとめる最後のダンスを、そうした日米文化を超えたカップルの身体表現として読者に提示しているのだと推測できるが、その現代的意義には、特に日本人としては、共感しかねる。そもそも、Cloud が白人の暴挙に対してゴースト・ダンスを舞うことにより異議をとなえようとするのは理解できるとしても、ゴースト・ダンスの魔術的效果を第二次世界大戦の時代状況で活かすことができると思えないし、Cloud が主人公やその子孫を同

じ部族(tribe, 322)として考えている共同体のなかに白人がどのように位置づけられるのかは不明である。

多文化、共生という意味では、狼や死者の魂、アマテラスから山の精のために舞うのはイメージとしては美しいが、その現代的意義については細部が問題となる。憎しみと欲望、銃と鉄条網が不毛にした世界を再生する前に、その世界をより正確に認識する努力をさけて通ることはできない。意識して太陽女神のアマテラスのために踊ったことがある日本人は少ないだろうし、アマテラスの役割とジェンダーもこの場面にあてはめると、それがまさに鉄条網を潜り抜ける瞬間の幻影であるにしても、不可思議である。

They dance for the wolf and deer, coyote and bear, buffalo and elk, for all the parts of souls wandering in the Land of Ghosts, where hatred, greed, guns, and barbed wire have rendered a barren world. They dance to the Goddess of the Sun, Amaterasu, to the prophets Wodziwob and Wovoka, to the Spirits of the Whirlwind and the Mountains. (325)

この引用の直前で、運命で「シカタガナイ」(Shi kata ganai, 323)と考えていた主人公が、Cloud の手に引かれて引用の直後に、“She is free! Free again to begin and end another life” (325) と深呼吸をする。その後の歴史的現実を踏まえて読むと、またかという思いとともに、文化の掛橋を構築することの困難さを思い知らされる。

6 人種と世代を超えて

日系アメリカ文学の作品を分析して、人種と世代で分類して理解する他に、より広い視点から、文学の評価を視野に入れて検討する必要があることを述べてきた。そうした必要はすでに認識されているし、先行研究でも実践されているが、幅の広い知識に加えて文学的评价基準を設定しなければいけないという困難を抱えている。最後にそうした困難の例を踏まえて、今後の日系アメリカ文学や文化の研究の可能性を探る。

日系文学はアメリカの主流文学に対抗しうる分野として研究評価されてきたが、アメリカ現代文学と比較や評価は十分なされてこなかった。日系文学を、新たなアングルを見せてくれる多角的な鏡として評価するのが Donald Takaki (1993, 7) である。社会的な背景を視野に入れてアジア系文学研究を進めてきた Kim も評価できる。彼女が編纂した 2003 年のアジア系芸術に関する本の序文で、共編者 Margo Machida もアジア系アメリカ系の芸術が、新しい芸術観を可能にする点を評価している。

鏡の比喩はシェイクスピアからリアリズムまでさまざまに使われてきたし、ポストモダニズムでは あえてゆがめた像を映し出す遊園地の鏡や、二枚対面して無限に映像を繰り返す

鏡のイメージも使われた。そうした多様な鏡のなかで、アジア系アメリカ文学がどのような文化を映し出しているのか、そしてそれがどのような可能性を持つのかを今後も考えてゆかなくてはいけない。現代アメリカ文学を展望する試みとしての文学史で、Malcolm Bradbury は現代の文学研究の役割は新たな視点から問題(questions)を何倍にも増やすことであると指摘している。

新たな表現を評価すること自体は Ezra Pound が広い意味でのモダニズム、細かくはイマジズムの芸術的目標として設定したものであるが、現代では、それが人種や世代の類型的なイメージや差別とのかかわりでも問題とされる。それがアメリカニズムとジャポニズムという流れのなかで現代の日系アメリカ文学をより広い視野から見直す必然性につながるはずである。

そうした研究で大衆文化からオリエンタルのイメージを研究した Robert G. Lee に注目し、この分野の困難を例示する。Lee は *Orientalists: Asian Americans in Popular Culture* において映画 *Sayonara* (1956) を取り上げて、「ポカホンタスとしての戦争花嫁」を分析する過程で、日本が性的不思議の国(sexual wonderland, 164) として表現されていることを指摘する。それは歌舞伎と宝塚の俳優の性別と役割の自由な選択を証拠として説明されるのであるが、日本人としては意外な指摘であると感じられる。日本における性の不思議の国が、歌舞伎役者が女性の優雅さと男性の力強さを共存させていて、女性を演じた役者が力強いライオンに変身するし、宝塚では芸者として登場した役者が、燕尾服に着替え、神道の神官に変身し、侍の衣装をまとい、最後にはプリンセスとして登場することが例示されている。この記述は映画の解説ではあるのだが、両方の演劇形態において、ふつう性別は舞台上で自由に転換されないこととか、歌舞伎における女形の歴史的経緯などの説明はない。歌舞伎でも宝塚でもそうした特殊なファンタジーのような変身はあるのかもしれないが、それを性的不思議な国の根拠とするのは異文化研究としては説明不足であると思われる。

そうした困難を乗り越えるのは、異文化理解の知識であり芸術作品の流通にまで関わる状況の認識であろう。この単純な事実はその対象分野が広だけに実践は困難を極める。ここで取り上げた作品も先行研究も、ともにそうした困難を無視したわけではないだろうが、人種や世代の理解と表現に描かれた当の日本人を納得させるだけの真実らしさや説明が不足している例である。Kim も、私たちが何を知る必要があるかを知るのが肝要であると論じている。(2003, 178) オリエンタリズムという言説の背景にそれを流通させる背景があったことを顧みるならば、比較文化を通しての異文化理解の困難さの原因が情報量が格段に増えた現代においても、個人の理解力の限界と商品としての芸術作品の拘束から免れていないと言えるだろう。今後も、そうした困難をより自覚的に乗り越えようとするのが芸術家と研究者の責任であろうし、そうした困難を日本人として読み取るのが、日本人としての日系アメリカ文学研究の目標であり続けるであろう。

参考文献

- アジア系アメリカ文学研究会編. 『アジア系アメリカ文学 記憶と創造』. 大阪: 大阪教育図書, 2001.
- Bercovitch, Sacvan. *The Rites of Assent: Transformations in the Symbolic Construction of America*. New York: Routledge, 1993.
- Cheung, King-Kok. "Re-Viewing Asian American Literary studies" in King-Kok Cheung, ed., *An Interethnic Companion to Asian American Literature*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.
- Cowart, David. *Trailing Clouds: Immigrant Fiction in Contemporary America*. Ithaca: Cornell UP, 2006.
- Delbanco, Andrew. *The Real American Dream: A Meditation on Hope*. Cambridge: Harvard UP, 1999.
- Eagleton, Terry. *The Idea of Culture*. Oxford: Blackwell, 2000.
- . *The Meaning of Life*. New York: Oxford UP, 2000.
- Harraway, Donna J. "Cyborg and Symionts: Living Together in the New World Dorder," in Chris Hables Gray, ed., *The Cyborg Handbook*. New York: Routledge, 1995.
- . *The Companion Species Manifesto: Dogs, People, and Significant Otherness*. Chicago: Prickly Paradigm Press, 2003.
- Houston, Jeanne Wakatsuki and James D. Houston. *Farewell to Manzanar*. 1973. New York: Dell, n.d.
- Houston, Jeanne Wakatsuki. *The Legend of Fire Horse Woman*. New York: Kensington, 2003.
- 亀井俊介. 「比較文学の危機と楽しみ」. 秋山正幸・榎本義子編. 『比較文学の世界』. 東京: 南雲堂, 2005.
- Kim, Elaine H. *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*. Philadelphia: Temple UP, 1982.
- , et al. *Fresh Talk, Daring Gazes: Conversations on Asian American Art*. Berkeley: U of California P, 2003.
- 木下卓 他. 『多文化主義で読む英米文学——あたらしいイズムによる文学の理解』. 京都: ミネルヴァ書房, 1999.
- Lee, Robert G. *Orientalists: Asian Americans in Popular Culture*. Philadelphia: Temple UP, 1999.
- . *Multicultural American Literature: Comparative Black, Native, Latino/a and Asian American Fictions*. Edinburgh: Edinburgh UUP, 2003.
- Lowe, John Carls, ed. *Post-Nationalist American Studies*. Berkeley: University of California Press, 2000.
- Mori, Kyoko. *Shizuko's Daughter* 1993. New York: Ballantine, 1994.
- . *The Dream of Water: A Memoir*. New York: Fawcett, 1995.
- . *Polite Lies: On Being a Woman Caught Between Cultures*. 1997. New York: Fawcett, 1999.
- 小川さくえ. 『オリエンタリズムとジェンダー』. 法政大学出版局, 2007.
- Okada, John. *No-No Boy*. 1957. Seattle: U of Washington P, 1979.
- 大脇美智子. 「他者化させる『日本の女』——キョウコ・モリとデヴィッド・ムラの日本の女の表象」. 海老根静枝・竹村和子編著. 『かくも多彩な女たちの軌跡』. 東京: 南雲堂, 2004.
- Prasso, Sheridan. *Asian Mystique: Dragon Ladies, Geisha Girls, and Our Fantasies of the Exotic Orient*. New York: Public Affairs, 2005.
- Pynchon, Thomas. *Against the Day*. New York: Peregrine, 2006.
- Sone, Monica. *Nisei Daughter*. 1953. Seattle: U of Washington P, 1979.

- Takaki, Ronald. *Strangers from a Different Shore: A History of Aisan Americans*. 1989. Boston: Little Brown, 1998.
- . *A Different Mirror: A History of Multicultural America*. Boston: Little Brown, 1993.
- 巽孝之. 「エキゾティシズム——他者憧憬と他者恐怖」. 木下卓 他編. 『多文化主義で読む英米文学』. 京都: ミネルヴァ書房, 1999.
- Tatsumi, Takayuki. "Pax Exotica: A New Exoticist Perspective on *Audrey*, *Anna-chan*, and *Idoru*, " *Full Metal Apache*. Durham: Duke UP, 2006.
- Wu, Jean Yu-Wen Shen and Min Song. *Asian American Studies: A Reader*. New Brunswick: Rutgers, 2000.
- Yoshihara, Mari. *Embracing the East: White Women and American Orientalism*. New York: Oxford, 2003.